

# サン＝シモンはなぜ『新キリスト教』か

富 岡 勉

## 目 次

1. はじめに
2. サン＝シモンの信仰— 一神教
3. キリスト教信仰
4. キリスト教信仰に対する批判
5. 地上の楽園
6. 『新キリスト教』に至る
7. おわりに

### 1. はじめに

思考が支離滅裂であるとか、空想的で夢が多いとか、余りよい批評を受けてないサン＝シモンは、それでは余りよくない環境に育ったからそうなったのだろうか。彼は貴族サン＝シモン家の出身であるから、悪い環境にあったとは言えないであろう。丁度、日本での徳川家治將軍の時代に当たる1760年10月17日、クロード・アンリ・ド・サン＝シモン (Claude-Henri de Saint-Simon 1760-1825) は、バルタザーアンリとブランシェーエリザベスの間の第二子で長男として生を受けた。生誕地はピカルディのベルニイで、父親のバルタザーアンリは伯爵で36才、母のエリザベスは21才であった。父は軍人で年金生活者であって大金持ではなかったが、ベルニイに広大な土地を持ち館もあった。このことから、クロード・アンリはパリーの社交界には幼少の頃から出入りしていたと思われる。この中で彼は教育され啓蒙されたようであるが、とくに、百科全書の中心的人物ダランベールへの師事によって大きい影響を受けたようである。クロード・アンリ・ド・サン＝シモン (以下サン＝シモンと略称する) は13才の時、聖餐を受けることを拒み、父によってサン＝ラサールの刑務所に送られ、以後父との間に不仲のまゝであった。叔父叔母の同情により刑務所から解放されたが、父との距離は広まるばかりだった。

貴族の習慣として彼も軍人になった。大尉に昇進した時フランス軍に加わってアメリカ独立戦争に参加し、独立軍を援助してイギリス軍と戦った。自分の功績を告げることによって軍人である父の怒りを解こうと計ったけれども、父からは何の返事もなく、父は1783年2月この世から去った。

サン＝シモンはアメリカ滞在中、ヨーロッパにはない新しい世界を発見した。宗教的自由、社会的特権の通用しないこと、世襲財産が政治上では役に立たないこと、平和主義、産業と能力による出世の関係、民主的な制度の基盤のあること、と様々のことを見るにつけて軍人が自分に向

## 富 岡 勉

いていないことを悟った。

イギリス軍の捕虜となっていたが、解放されてフランスへ帰った。フランスでは1789年に始ったフランス革命に遭遇する。革命に理解を示し、自分も革命に加担するが貴族を放棄したにかかわらず、貴族だったということで捕まり、刑務所に投獄され、ギロチンにかけられる寸前に幸運にも、ロビスピエルの没落によって救われた。

彼は革命中投機で得た巨額の収入で大きい家敷をシャバネ通りで手に入れ、自分も研究活動に入って大学で物理、数学を学び、科学への情熱を燃やすこととなる。そしてやがて文筆によって愛国の精神のみならず、汎歐洲精神から人類を救おうという自分の考えを、世に訴え続けることとなる。巨額の富も彼のぜいたくな性癖から使い果し、かつての家僕の助けで生活を続けたりするわけであるが、やがて入院生活に入る。極度の精神消耗からである。またピストル自殺も計ったが助かり片眼を失うに至った。しかし、彼はなおも自分の構想を世に訴え続けた。

このような生涯を送ったサン＝シモンの作品を研究する場合、彼がオリンデ・ロドリゲ (Olinde Rodrigues) 宛に書いた次のような手紙を無視するわけにはいかないであろう。

他のすべての人と同様、わたしは神の哲学を体系化しようとした。宇宙現象から太陽現象へ、そこから地上現象へうまく説き及び、究極的には地上現象の従属物の一つと考えられる人類を研究すること、そして、この研究から社会組織の法則と、わたしの探求の基本で本質的な目的を引出すことをしようとした。<sup>註</sup>

このことからみれば、彼は神の哲学の体系化を目指し、それは、人文、社会、自然の何れの分野においても基本であると見たのではなからうか。

これを念頭においた場合、彼の1802年から3年にかけての『ゼネバの一住人から同時代の人々への手紙』(Lettres d'un habitant de Genève a ses contemporains, 1802-1803) からはじまり、1825年の彼の最後の作品『新キリスト教』(Nouveau Christianisme) に至る間の彼の理論が一貫していることがわかる。彼は一見、同じことを各所で繰返してみたり、支離滅裂の理論を述べているように見えるが、上述の彼の手紙に注目すれば、その底を流れる一つの構想のあることがわかるであろう。それは神の哲学による社会組織の法則を見出そうということではなからうか。そのことが最後には、けんか分れになったとは言え、アウグスト・コント (Isidore-Auguste-Francois-Marie- Xavier- Comte) との社会学への道を拓いていったことになるであろう。

註. Oeuvres de Saint-Simon & D'Enfantin, AALEN OTTO ZELLER 1963, tome I, Notices Historiques, p. 49.

## 2. サン＝シモンの信仰— 一神教

サン＝シモンが神の哲学というからには、その神とはどのような神だったのか。まず、これを

求めてみることにしよう。

彼が神を信じていたことは疑いなさそうである。それは、完全ではなかったがほとんどまとめたとおわれ、また自己の作品の総括のような『新キリスト教』中での、保守主義者 (conservateur) と革新主義者 (novateur) との冒頭での次の対話から明確であろう。

保守主義者 あなたは神を信じるか？

革新主義者 えゝ。わたしは神を信じる。<sup>註1</sup>

また、

心がけの悪い人をわが代表と認めて神を敬わないことに対し、人間は恥しさで一杯になるであろう。<sup>註2</sup>

とも述べている。

作品の年代からみれば、『新キリスト教』が1825年の彼の死の直前の作品ではあるが、それまでの彼の作品の随所に神に関連する記事が見られるところから、彼がすでに早くから神を信じていたことは疑いないと言えよう。

それでは彼はどのような信仰者だったろうか、彼が、まず、自ら述べるところでは彼は理神論 (deisme) 者であった。<sup>註3</sup> もっとも、この理神論については、今日で言う、神が自然法則を創造し、宇宙を神が創造して以来、神は自然法則のなすにまかせたという18世紀以後に用いられた厳密な意味の見解ではなく、当時の理解に添った無神論 (atheisme) とか多神論 (polytheisme) に対する有神論を指しているものと見て差支えないのではなかろうか。

そして彼は、社会学者らしく理詰め神を求めていく。1807～8年に記した『19世紀の科学的研究序論二巻』 (Introduction aux travaux Scientifiques du XIX<sup>e</sup> siècle tome II) でも述べているし、1813年の『人間科学の覚え書』 (Mémoire sur la science de l'homme) においても述べている。彼は宗教を人間の創意と考えた。<sup>註4</sup> これを土台にして神の追求がはじまる。『19世紀の科学的研究序論』によって彼の考えを伺ってみよう。宗教的体系は人間の知性が原因と結果を区別した時以来、それが同時に神の啓示の体系としてはじまった、とする。しかし、これは歴史的に調査することは不可能である。だが、歴史はエジプト以来今日まで、宗教的思想の由来を跡づけることを準備をしてはくれる。エジプト人は、偶像礼拝によって、星、川、山、野菜、動物などを崇拜した。その後ギリシャにホーマが現われ、宗教的才能を増進した。ホーマは人間的才能を人格化して、才能によって神とあがめられることを行った。次にソクラテスは一つの神を創造した。ソクラテスはあらゆる実在を一つの原因の結果として認めるべきことを教えた。ソクラテス後500年を経てイエスが現われた。イエスは聖霊の導きを伝えたが教義の実体を残さなかった。そして、イエスの弟子パウロがキリスト教の教義を組織化した。キリスト教は15世紀頃まで

富 岡 勉

は隆盛を極め、そのためカトリック僧侶の不勉強と墮落が生じ、次第に平信徒たちによって権力の後退をよぎなくされていく。それは、平信徒たちが、神の啓示の現象追求を科学という名によって行いはじめたからである。コペルニクス、ケプラー、ガリレオが、神聖な神の法則の警護者と自ら認じていた僧侶たちの手から、神によって創造された地球を奪ったからである。16世紀に入りベーコン、デカルトが現われ、ニュートンが万有引力説を述べてこれらのことを決定的なものとした。これは要因の一元性を明確にしたもので、神の啓示がすべて一元のものであることを証明したものだから、社会の法則にも適用される。新しい宗教の土台でもある。人間の神への信仰が多神教から一神教へと移って行ったことを示している。

サン＝シモンは『人間科学の覚え書』の中の『人間知性の発展の順序』<sup>註5</sup>を記したところで、その第1段階において、カルル大帝によって創始されたヨーロッパで、ヨーロッパ人は第1に原因と結果の思想の区別をたて、宗教的思想を組織だて、第2に多神教を組織化し、第3に一神教を組織化し、この一神教は法則によって支配される宇宙の考えを土台とする一神教である、としている。

註1．Oeuvres de Saint-Simon, tome III, Nouveau Christianisme, p. 107.

註2．Oeuvres tome I, Lettres d'un habitant de Genève, p. 48.

註3．Oeuvres tome VI, Introduction aux travaux Scientifiques du XIX<sup>e</sup> siècle, p. 171.

註4．Oeuvres tome I, Lettres d'un Habitant de Genève, p. 58.

註5．Oeuvres tome V, Mémoire sur la science, p. 171.

### 3. キリスト教信仰

サン＝シモンが理神論者であり、一つの神を信仰したということが明らかになったが、彼の信仰が福音信仰でなかったことと、法則によって支配される宇宙の考えを土台とする一神教であったことに注意しておくべきであろう。では一つの神とは誰かということになろう。それは結論を先に言えばキリスト教の神である。先に『新キリスト教』の冒頭でサン＝シモンが神を信じると告白しているのを記したが、それにつづいて

保守主義者 あなたは、キリスト教が神聖な起原を持っていることを信じるか？

革新主義者 はい、わたしは、それを信じる。<sup>註1</sup>

と記している。また、さらに彼は

革新主義者 神が自らキリスト教会を建設されたことを信じる。<sup>註2</sup>

と述べている。

彼は人間知性の発展の順序として現在たどりついているのは一神教であり、しかも、ヨーロッパ重視の彼は、ヨーロッパに根強く広がっているキリスト教以外には宗教を考えられなかったと思われる。幼少の頃からフランスの帯剣貴族の子として育ち、しかも、フランス貴族たちはカトリック教徒で占められ、その影響を多く受けるとともに、カトリック的教育を強いられたことであろう。だから、キリスト教は身をもって経験していたと言えよう。そして社会組織の維持に宗教の必要性を信じ、<sup>註3</sup>キリスト教の枠外には出られなかったのではなかろうか。そして彼の発想のすべては一元的な神の法則から出発した諸現象の解明の途をたどる<sup>註4</sup>と見たと言えよう。これをサン＝シモンは『新キリスト教』において、

保守主義者 宗教のどんな部分を神聖だとあなたは思うのか？ どんな部分を人間だと思  
うのか？

革新主義者 神は言われた。人は互に兄弟として扱わねばならないと。(以下・・・は原文  
でイタリック部分、以下同じ) この崇高な原理は、キリスト教において神聖で  
あるあらゆるものを包含している。

保守主義者 なんだって！ あなたはキリスト教の神聖な中身をたった一つの原理にまと  
めるのか？

革新主義者 神は必然的にすべてのものを一つの原理にまとめられた。そうでなければ、  
人間に対する神の御意志は体系的でなかったであろう。全能の神がその宗教を  
数種の原理の上に築かれたと主張するのは、神をないがしろにすることになる  
う。

ところで、人間の、行為において人間を導くために神がお与えになったこの  
原理に従って、人間は、最大多数の最大利益へ社会を組織化しなければならないし、  
最大多数階級の道徳的物質的状况を出来るだけ速やかに、かつまた、出  
来るだけ完全に改善する方向に向って、自分たちの仕事全部を、また、あらゆる  
自分たちの活動を管理しなければならない。

キリスト教の神聖な部分をなすのはこれであり、また、これだけだと、わた  
しは申し上げる。<sup>註5</sup>

革新主義者 ……神ご自身が言われたことと、僧侶が神の名によって言ったこととの間に、  
区別がなされねばならない。神が言われたことは確かに改善出来ないが、僧侶  
が神の名において言ったことは、すべて他の人間の科学と同じように改善出来  
る一つの科学を形成する。……<sup>註6</sup>

保守主義者 ……あなたは教会を一つの神聖な制度と認めるか？

革新主義者 神が自らキリスト教会を建設されたことをわたしは信じる……

初期教会のこれらの指導者たちは、すべての人々に一致の必要を親しく宣べ  
伝えた。彼らは互に平和に暮すよう促した。……

富 岡 勉

保守主義者 さらにあなたの考えを話して、キリスト教会を絶対に誤りのないものとみなすかどうかを知らせてほしい。

革新主義者 神聖な目標に向って社会の諸勢力を導くのに最適の資格のある人が教会を指導する場合、教会は絶対に誤りがないと言っても差支えなく、また、そのような状況においては、社会は教会によって導かれるまゝにしておくのが賢明だとわたしは信じる。

教会の神父たちが生きていた時代には、絶対に誤りがなかったと神父たちのことを思うけれども、ところが、今日の聖職者たちは、すべての設立されている団体の中で最大の過誤を犯し、社会に最も有害な誤りを犯している組織体、すなわち、その行動が神聖な道德の基本原則と最もまともに相反しているのである。

保守主義者 それでは、あなたによればキリスト教は大変悪い状態にあるのか？

革新主義者 逆である。これほど多くの善良なキリスト者が存在したことはいまだにない。しかし今日、彼らはほとんどみな平信徒に属する。15世紀以来、キリスト教は一致を失い、もはやキリスト教的僧侶は存在しない。……最も権力ある僧侶は、また、最も異端的である。

保守主義者 あなたが思っているように、キリスト教を宣教する責任ある人が異端者になっているとすれば、キリスト教はどうなるのか？

革新主義者 キリスト教は普遍的な、また、唯一の宗教となるだろう。<sup>註7</sup>

と自信をもって述べていることから明らかであろう。そして、最大多数の最大利益というベンサム功利論的思想への進展から、彼の社会学者としての息吹きが感ぜられよう。

註1. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 107.

註2. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 110.

註3. Oeuvres tome VI, XIX<sup>e</sup> siècle, p. 168, 170.

註4. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 109.

註5. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 108-109.

註6. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 108.

註7. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 110-112.

#### 4. キリスト教信仰に対する批判

ではなぜ、サン・シモンは自分の信仰をキリスト教にとどめずに新キリスト教と称したのだろうか。それは、カトリックの墮落と驕りに対する弾劾とプロテスタントに対する不満のためであろう。いま、これをみることにしよう。

まず、カトリックに対しては4ヶ条の異端について告発している。その第1は、カトリック僧

侶がその平信徒教員に与える教育の欠陥である。<sup>註1</sup>キリスト教の道に添った教育を行わず、キリスト教の目標でない異端の目標を法王も枢機院も指導していることである。では、キリスト教の目標とは何か？ それは、「貧しい人の道徳的物質的状态を出来るだけ早く改善することを地上の目的とする」<sup>註2</sup>のものであり、「イエス・キリストは、最大多数階級の福祉増進に最も熱心に活動する人たちに、永遠の命を約束された。」<sup>註3</sup>というのである。いゝ換えれば、「人類の大多数は自分がこれまで受けてきたものよりも、なお一属満足すべき道徳的物質的状态を享受することが出来、富める者は、貧しい者の幸せを増進することによって、自分たち自らの状態を改善するものである。」<sup>註4</sup>ということであるにかゝらず、カトリックの教義について書かれた作品とか祈禱には明確にこれらを述べたものは見当らず、神秘的な概念の繰返しが多いということである。

異端告発の第2は、「救いに向って信者を導くに適した知識が欠如」<sup>註5</sup>していることである。彼の言うところではそれは、「聖職者の新しいメンバーが、面倒を見る群をまかされる能力のある立派な牧者となるために、十分教育を受けることを強調しそこなって、神学生に悪い教育を与えていること」<sup>註6</sup>である。この悪い教育とは神学校で教える神学であるらしい。「それは疑いもなく、異端の僧侶にとってあらゆる科学の中でも最も重要なものである。なぜかといえば、信者の注意を些細なことに引きつけさせ、また、永遠の命、すなわち、貧しい階級の道徳的物質的状态を出来るだけ早く改善することが出来るようにさせるために、自ら設定しなければならない地上の大目的を、キリスト者に見失わせることが出来るからである。」<sup>註7</sup>彼はさらに、ローマ派の僧侶はレオ10世の法王即位まではよかったが、これ以後が駄目だという。それは、これまでは僧侶は研究し勉強して科学の面においても平信徒を指導してきたが、それ以後は逆に、美術、精密科学、産業能力において平信徒の方が優れるようになってしまったからである、ということである。

第3の異端的行状の告発は、平信徒である君主の統治よりも、法王の統治が、貧窮に属する地上の民草の道徳的物質的利益に一層反している。<sup>註8</sup>ということである。それは、ヨーロッパ中で法王統治下が最も公益管理が不当で最も反キリスト教的だという。サン・ピエル寺院の寺領では、かつては収穫が多かったおびただしい土地が、法王統治の怠慢から疾病の出る湿地に変わったり、耕作しない荒地になっている。不毛の原因は職業農家に重きをおかず、農業に尊敬が払われなから、能力のある者は農業をさける。さらに法王は、寺領での独占権行使をお気に入りの枢機卿に与えたりしている。また、産業が麻痺状態になっているので、貧しい人は仕事がなく、お慈悲で政府に養われ、悪い栄養状態で、彼らの物質生活は真にあわれなものである。そして、勤労意欲を失って無為の人となり、この無為は収入を得るための強盗行為の母体となっている。このような統治は反キリスト教的過誤を犯していることになる。<sup>註9</sup>

異端告発の第4は、法王、枢機卿などが二つの制度を作ることに賛成し保護を与えたことである。<sup>註10</sup>二つの制度とは宗教裁判とイエズス会の存在である。宗教裁判の精神とは専制でどん欲で、その武器は暴力と残忍とである。<sup>註11</sup>したがって、宗教裁判は邪悪で反キリスト教的である。なぜかといえば、イエスはどんな例外をもお許しにならず、教会が暴力を用いることも禁ぜられていた筈である。<sup>註12</sup>また、イエズス教団の精神は利己主義で、計略によって自分たちの目的を達成しよう

## 富岡 勉

としていて、聖職者と平信徒の両者の上に一般的な支配を行使することであった。このことからサンシモンはカトリックを告発するのである。そして彼は、

キリスト教の精神は温和で善良で慈悲深く、就中、誠実である。その武器は信仰と証<sup>あかし</sup>とである。<sup>註13</sup>

と述べている。

サンシモンはカトリックに向けた刃をプロテスタントにも返している。彼は主としてルターを中心にして異端を叫ぶ。三つの告発をする。第1は、プロテスタントは文化の現状の中でキリスト者に当てはめる道徳よりも、もっと劣った道徳を取り上げた<sup>註14</sup>という。これには4点をあげる。第1点は、「イエスが人類再組織の使命を、その弟子たちにお与えになった時の社会組織の状態はどんなものであったか？」<sup>註15</sup>ということである。この時期は文化はまだ揺籃の時期で、道徳体系も宗教体系もない多神教時代である。従って博愛の情も薄く小規模の領土と人口の国々はそれぞれ愛国心を強めていた時代だから、地球全体のことは知られていなかった。だから、キリスト教は、その道徳も、礼拝と教義の形式も、信徒も牧師も、当時の社会組織とか習慣とか道徳の範囲外におかれていた。<sup>註16</sup>第2点は、「ルターが改革をはじめた時には、社会組織の状態はどうだったか？」<sup>註17</sup>ということである。この時代はイエスが宣教した時代と異り、奴隷制度も殆んどなくなり、貴族も社会的に重要な地位を独占することもなくなり、才能によって貴族になったものは、世襲貴族よりも優秀であった。ヨーロッパ中心の社会もキリスト教と道徳が一つに組合わされた体系を持つに至っていた。それは、当時は神の愛と隣り人の愛とが信仰の最も一般的な感情に一元性を与えたからである。<sup>註18</sup>そして、最強者の法律にとって代ってキリスト教が社会組織の基礎となった時代である。さらに、愛国主義にとって代って博愛の情が満ち、人間はすべて神の子としてお互に認め合うようになった時代である。第3点は、貧しい者も神の大切な子供だと説くだけでなく、これを実践に移し最大多数階級の道徳的物質的状态を速やかに改善するよう、権力と手段を行使すべき時にきている。これは新しいキリスト教である。つまり、神聖なキリスト教の道徳原理に従って全人類を組織化する時代に来ている。このため、美術と科学の産業の才能が人類福祉のために用いられる時が来ている<sup>註19</sup>と彼は訴える。最後の第4点は、ルターはキリスト教を出発点に戻しただけであると言う。<sup>註20</sup>キリスト教をカトリックから改組して再組織すべきであったのに、単に正しい聖書の解釈を原点に戻って示しただけである。この点で先に記したように時代が移っていることの認識が足りなかったので、初期のキリスト教道徳をそのまま新しい時代に取り上げたから、現在の水準よりはるかに遅れた道徳を押しつけることになった。

サンシモンのプロテスタントに対する異端告発の第2は、礼拝の形式が不都合であるということである。<sup>註21</sup>これは何かといえば、ルターがカトリックの偶像礼拝を打破し、すべての飾り物を除去し簡素なものにしたことに対する抗議である。理由は次の通りである。時代が移り社会が道徳的物質的に改善されれば、美術、科学、産業が人類福祉のために重視されるべきだとすれば、



礼拝形式も改善されることが必要である。なぜかと言えば、礼拝の目的は、安息日の定期的の集會に來た人々に、その注意を、社会の全メンバーの共通の利益、人類の一般利益に引きよせるようにすべきである。<sup>註22</sup>従ってプロテスタントの礼拝で牧師は信徒の注意を共通の利益に引きよせるような礼拝を行うべきである。これがまた、人は互いに兄弟として取扱うべきであるということにつながる。そのために、礼拝での工夫が必要であるに不抱、ルターは礼拝を説教に変えたにすぎない。装飾を禁止し音楽を抑制し、信者の魂を共通の利益に対する感情で満たしてやるべき効果的な補助手段を除去して、教会を最も荒涼とした宗教的建築物に変えてしまったと告発する。

第3の告発は、プロテスタントが誤った教義をとり上げていることである<sup>註23</sup>という。そして、聖書の研究を強調しすぎるといっているのである。<sup>註24</sup>そのため聖書研究は、

1. 実証的な考え、現今の利益についての考えを見失わせてしまった。それは目的のない探求への愛好を与え、形而上学の方へ強く傾かせてしまった。
2. 古い昔の悪徳を再び思いおこさせることになった。
3. 公益に反して政治的な欲望に注意を引きつける。美術、科学、産業に有能な人がたづさわることによって社会の活性化がもたらされ、政治体系の構成が一般利益が管理されるようになることを妨げることになる。というのは、実行不可能な平等な社会を設立しようということになるからである。
4. 聖書協会による聖書の普及ということになり、精力の消耗がそのために行われ、これが人類の進歩に役立っていると思ひ、公益にエネルギーを注ぐことを鈍らせ、また、真のキリスト教の博愛感情を虚偽の方向に走らせてしまう。<sup>註25</sup>

という結果になっているといっているのである。

註1. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 121.

註2. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 121.

註3. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 121-122.

註4. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 122-123.

註5. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 124.

註6. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 125.

註7. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 125-126.

註8. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 127.

註9. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 129.

註10. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 127-129.

註11. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 130.

註12. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 130.

註13. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 129-130.

註14. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 142.

註15. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 143.

註16. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 145.

註17. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 143.

註18. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 146.

- 註19. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 147-157.  
 註20. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 157-158.  
 註21. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 158.  
 註22. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 159.  
 註23. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 165.  
 註24. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 169  
 註25. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 169-171.

## 5. 地上の楽園

以上のようにサン＝シモンはキリスト教を信じつゝも、カトリックを告発し、プロテスタントを告発する。それでは彼はどのようなキリスト教を信じるというのだろうか。こゝで彼は、『新キリスト教』を宣言するに至るのである。それは、

次の原理、すべての人は互に兄弟として取扱うべきであるということは、神が教会にお与えになったもので、全社会は最も貧しい階級の道徳的物質的状态を改善するよう働くべきである。社会はこの大目的を達成するのに最も適した方法で組織化されるべきである。<sup>註1</sup>

ということである。つまり、このテーゼに基いて「地上の楽園」(la terre un paradis) を作ろうというのである。<sup>註2</sup> 最初は彼は『ゼネバの一佳人から同時代の人々への手紙』の中で三階級を設定する。第1階級に科学者、芸術家、文化の進歩に遭進する人をあげ、彼らは天分があつて人間精神進歩に役立ち、そして彼らが社会のリーダーになるべきだと考えた。次に彼等を支えるものとして財産所有者を第2階級に据える。つまり、財産を持たないが天分才能がある第1階級を財政的に援助する階級だということである。財産あるが故に無為徒食に終らず、財産を寄付することにより、寄付金で第1階級の人々に安心して才能を発揮させる可きだということである。第3階級は前の二階級に属さない多くの無産者階級である。彼らは数に物をいわせて、一人一人は少しの寄付でも多数のために総額は大きいものとなる。これによって第1階級の才能を発揮させ、最大多数の最大幸福を享受出来る社会組織を創設すべきだとする。このことから社会のリーダーには科学者を選び、その選出は選挙に訴えようとした。

そこで彼は『19世紀の科学的研究序論』の中で、科学的研究の歴史をたどりはじめる。まず、17世紀からはじまる。17世紀の科学者の代表的人物としてベーコンをとりあげ、ベーコンが経験を出発点として、これを総合帰納する過程を追求したことを賞賛する。経験から得た科学的知識を組織化し、体系化することの必要を示し、これらを体系化するとき総合的に進むことの必要を説いたという。<sup>註3</sup> 続いてサン＝シモンの母国フランスの哲学者、数学者、自然科学者であるデカルトを取り扱う。デカルトが宇宙構造の説明を行おうとして、渦巻体系 (le système des tourbillons) の台頭によって影響を受けたことを認め、デカルトの新体系樹立の骨格を築いたと言う。<sup>註4</sup> 18世紀に入りサン＝シモンは代表的科学者としてロックとニュートンを掲げる。特にニュート

ンの万有引力説には満こうの敬意を表し、ニュートン教を唱えるほどであった。なぜかといえば、ニュートンは宇宙に対する神の啓示を推論によって証明したのであって、とくに、神が一つの原理によって宇宙を統べておられることを推理証明したというのである。このことからサン＝シモンは自然科学のみならず人間関係社会にも、神の一つの原理が働いている筈だと推論していくのである。

そして彼は、19世紀では、この推論から、人間関係の社会では一つの原理から道徳原理が引き出せるとみる。それは聖書の黄金律「自分自身を愛するように自分の隣り人を愛する」\*<sup>註5</sup>ことから、他人にしてほしいと思う通りに他人にすることに变化していく。<sup>註6</sup>

\* この黄金律の言葉は、18、9世紀の社会学者には、彼らの理論の土台となっていたように思われる。現在のごとく社会科学がキリスト教から乳離れしていなかったため、人間の側だけから論ずる社会科学でなかったようである。したがってアダム・スミスも『道徳情操論』の中の第1部第1篇道徳的適正感の第5章（The Theory of Moral Sentiment by Adam Smith, Part I, Section I Chapter 5, Of the amiable and respectable Virtues, p. 71-72: Liberty Classics, Indianapolis）においても同じように取り上げている。サン＝シモンはスミスをしばしば取り上げていることから見て、スミスを重視していたと思われる。

そしてそれはさらに変化する。「福音書の原理に対し、次の原理を代わりとすることをわたしは提案する。すなわち、人は働かねばならない、と。」<sup>註7</sup> 自分を愛するように他人を愛することは、他人がしてほしいと思う通りにしてやることで、他人の望むことをしてやることは、他人が幸福な生活を送ることにつながる。そしてさらに、最大多数の最大幸福は他人の生活を豊かにすること、特に生活物質を豊かにしてやることになる。これは生活物質の生産を高めることで、生産のための有効労働を増加させることにつながり、人は働かねばならない、という結論になって行く。従って彼は労働者の働きが生産を増加させるから彼らは道徳的に最も幸福な人であるということに結論づけた。このような人々を啓蒙するため科学者を動かして新百科全書を刊行しようとした。グランベールやディドロによって刊行された「18世紀の百科全書はその時期に適した精神で書かれたが、現況には適当でない。それは当時の文化につりあった計画に従って構成されたけれども、文化のその後の進展によって、それ以来可能となったものに対しては全く劣っていた」<sup>註8</sup> ので、「19世紀の百科全書は、その各部門においてばかりでなく、全体として、科学は観察に基くべきだという原理に基礎を置かねばならない。だから、百科全書の基礎は人間精神進歩の歴史の分析でなければならない」<sup>註9</sup> ということになった。

このことからサン＝シモンは人間の研究に入る。そして1813年に『人間科学の覚え書』をものにした。この中では人間の肉体の研究からはじめ、フランスの医者ヴィク・ダジール（Vicq-d'Azyr）、同カバニス（Cabanis）、解剖学者ビシヤ（Bichat）及び数学者で哲学者だったコンドルセ（Condorcet）の作品から多くのものを得たようである。そして人間科学を生理学の一部門、あ

## 富岡 勉

るいは組織現象の科学だと考えたらしい。<sup>註10</sup>これがやがて、社会組織の概念へ変化していく。彼はこれらのことをさらに、ブルダン (Burdin, M)、ブーゴン (Bougon)、エルスナー (Oelsner) を通して人間精神の理解へと進み、人間知性の発展順序を12段階に分けて考察している。<sup>註11</sup>この中では以前の論述を繰返しているようであるが、第8、9段階でローマ時代に至り一神教となり、最後の第12段階で、神の創造した宇宙が単一不変の法則に支配されているという信念を土台として、人間の知識の一般体系も再組織されるだろうと述べている。

同じく1813年にものにした『万有引力の研究』(Travail sur la Gravitation Universelle) の中では、強く単一性ということを主張する。これは主としてナポレオン皇帝への献呈文からなっている。この中でまず、政治上の統一性ということを経済に進言する。カルル大帝がヨーロッパを統一組織化したが、15世紀以後これが揺らぎ、いま、政治的統一の出来るのはナポレオン皇帝であるという。そして宗教はヨーロッパの共通の道德規範であるから、ナポレオン皇帝の力によって道德的統一も行われるようにと希望している。また、その道德は同胞に役立つ方法で幸福を追求すべきであることは経験が証明する<sup>註12</sup>という。

この幸福追求がやがて産業論へと進展する。その前に『ヨーロッパの再組織』(De la réorganisation de la Société Européennè) を1814年に世に出した。こゝでは、「……ヨーロッパの全立憲国が議会によって治められ、また、すべての国の政府の上部に設けた共同体会議の優位を認め、その討議をまとめる権限をこの会議に与えれば、ヨーロッパは最高の組織を有するに至るであろう。……」<sup>註13</sup>と述べ、ヨーロッパの道德的一致のためヨーロッパ共同体を力説することは、約170年前に今日の EC 共同体を考えていたと見ることは間違いであろうか。これは受入れられるものとして、サン・シモンはその先達露払いになる決心を「道を開くことがわれわれの仕事である」<sup>註14</sup>と自分を洗礼者ヨハネの立場においている。こうして、彼はイギリス、フランスにふれて行って、神学による天国ではなく新しい地上の幸福の最終到達点に近づき、1817年に『産業論』(L'Industrie) へと進む。

地上の幸福とは地上に樂園を築くことであり、それは物質的・道德的福祉のことであった。従って「最大多数の最大幸福」がねらいである。このことはカトリックもプロテスタントも失敗に終わっているからヨーロッパは危機に直面している。従って『新キリスト教』によってこれを達成しなければならないと考えたのであろう。無知で貧乏な大多数の人間の社会的状態を改善することが大切であり、これを推進する道德が必要で、それには学者、科学者、芸術家を中心とする靈的権力をもってすることと、もう一つは、地上権力として経済経営の専門家・産業者だった。このことはもはや、貴族や大地主の如き世襲的支配者から能力による産業者の管理社会への脱皮を意味していた。

註1. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p. 173.

註2. Oeuvres tome I, Lettres d'un habitant de Genève, p. 48.

註3. Oeuvres tome VI, XIX<sup>e</sup> siècle, p. 23.

註4. Oeuvres tome VI, XIX<sup>e</sup> siècle, p. 25.

- 註5. マタイによる福音書第19章19, ローマ人への手紙第13章9  
註6. Oeuvres tome VI, XIX<sup>e</sup> siècle, p. 176.  
註7. Oeuvres tome VI, XIX<sup>e</sup> siècle, p. 176.  
註8. Oeuvres tome VI Projet D'encyclopedie, p. 282.  
註9. Oeuvres tome VI, Projet D'encyclopedie, p. 283.  
註10. Oeuvres tome V, Mémoire sur la science de l'homme, p. 9.  
註11. Oeuvres tome V, Mémoire, p. 127.  
註12. Oeuvres tome V, Mémoire, ps. 302, 303.  
註13. Oeuvres tome I, De la réorganisation de la Société Européenne, p. 197.  
註14. Oeuvres tome I, réorganisation, p. 248.

## 6. 『新キリスト教』に至る

長いけれども次の文章を引用したい。

人間は生れつき怠け者である。自分の必要が満たされるということだけか、あるいは、快樂に対する自分の欲望によってだけか、自分の怠け心を克服する。従って人間は、自分の必要と欲望に応じてのみ働くだけである。しかし社会状態はといえば、人間を引きつける快樂は増し、それは人間の生産力よりもさらに巨大である。従って自分の働きによって直接入手出来ないある生産物を交換するに当って、自分が生産したものの一部をあきらめざるを得ない。この必要（それは人間のために富の源泉に変えられる）は人間が認める唯一のもの、人間が喜んで従う唯一のものである。つまり、産業者はそんなものなのだが、実際には唯一の法則に従う。すなわち自己利益の法則である。

しかし、周囲には社会がある。必要と欲望を他人と同じように持っているが、すべての人と共通する本来の怠け性を克服出来なかった大量の寄生虫、何も生産しないが、あたかも生産したかのように消費し、また、消費しようとする大量の寄生虫が、ふところの中でどぐろを巻いている。これらの人間は、その仕事から離れ、自分たちが与えられるものか、あるいは、自分たちが取ることが出来るものか、何れか離れて生きようと力を使う。つまり、彼らは怠け者である。いわば泥棒なのである。

働き人はこうして、自分の労働の目的である快樂を失ったわが身を目にし勝ちである。この危機の結果、彼らは特殊の必要を開発する。そしてその必要は全く特定のタイプの労働を代る代る引き起す。この労働の目的は、怠けるということが産業をおびやかしている暴力を防ぐことである。<sup>註1</sup>

この結果、「産業者の行動は道徳的である。」と『国民党または産業者党と反国民党との比較政治』(Le Parti National ou Industriel comparé au Parti Anti-National) の第10章で1819年に述べている。それは彼が度々言うように、「すべての道徳はイエス・キリストによって唱えられた大原理、すなわち、あなた自身のようにあなたの隣り人を愛せよ、人からしてほしいと望む通りに

人にせよから出ていることを認め」<sup>註2</sup>ているからである。

そこでサン＝シモンは1819年の『組織者』(L'organisateur)の第三書簡の中で次のように問う。

われわれは何をなすべきだったのか？

われわれは何をしたのか？<sup>註3</sup>

と。結論としては、「フランス議会の下院が、産業部門の首脳によって、すべての構成されるという結果によって議会制度を改革すべきであった」<sup>註4</sup>というのである。このことは、「国民の幸福が社会組織の唯一の目的」<sup>註5</sup>であるからであろう。この図式は簡単である。国民の道徳的物質的幸福をもたらすため、つまり、最大多数の最大幸福実現のため生活物資を豊富にすること。それには産業者が生産をやりやすいようにすること、そのため政治は産業者がリーダーとなること、そして政府の予算編成は産業者が議会で多数を占めてとり行うこと、ということである。

1823年3月になってサン＝シモンは経済生活の行詰りであろうかピストルで自殺を計ったが命をとり止め、一眼を失った。同情する人があって財政的援助があり立直った。そして勢を得て再び活動を始め、『産業者の教理問答』(Catéchisme des Industriels)を書くに至った。これは大部であって四分冊からなっている。しかし、第3分冊は弟子のコントが書いたといわれ、この序文がサン＝シモンとコントの別離の原因とされている。第4分冊は未完である。『教理問答』では産業者を中心とする体制をどのようにして実際に築き上げるべきかを記している。この問答形式は彼の最後の作品『新キリスト教』にも取り入れられている。サン＝シモンの時代にはしばしば手紙形式とか問答形式があったのではなかろうか。

『教理問答』では産業者がリーダーとなってとり行う社会活動を、どうやって行うかが記されている。

こゝにおいては、フランス産業の進歩を歴史的に観察し、産業者が能力、重要性、実力という条件においては、大きい進歩をなしとげていた間に、非産業者階級はあらゆる点で衰退を続けたにもかかわらず、相変わらずこの階級から国家財産の管理者を王は選び続けた。<sup>註6</sup>フランス革命により生れたブルジョア階級も産業者と非産業者の中間的橋渡しもせず、自分たちの利益のために封建制を再建して新貴族になってしまった。<sup>註7</sup>やがて産業者階級が第一階級になる日が来るであろうが、現時点はそれへの過渡期である。<sup>註8</sup>そして結局は、支配制度から管理制度へ変化し得る国はイギリスよりもフランスが先であって、<sup>註9</sup>それはイギリスでは貴族が権威を持ち、議会も支配しているから、産業制度を達成するまでには多くの困難が伴うけれども、フランスは、やろうと思えば、国王の一つの布告だけで達成出来る体制になっているから、国王さえその気になって産業制度を樹立する布告をすれば容易に達成出来る<sup>註10</sup>というのである。

このようにして1825年に至ってサン＝シモンは『社会組織』(De L'organisation Sociale)を書いたが、余命いくばもないと感じたのであろうか、その年にあわてて、いままでの自分の考えをまとめることに筆を走らせ、『新キリスト教』を書いた。これも、内容的には筆も半ばということで、第2分冊の計画も実現されることなく絶筆となった。

- 註1 . Oeuvres tome I, L'Industrie, p. 128-130.
- 註2 . Oeuvres tome II, Le Parti National ou Industrie, p. 197.
- 註3 . Oeuvres tome II, L'organisateur, p. 36.
- 註4 . Oeuvres tome II, L'organisateur, p. 49.
- 註5 . Oeuvres tome II, L'organisateur, p. 187.
- 註6 . Oeuvres tome IV, Catéchisme, p. 30.
- 註7 . Oeuvres tome IV, Catéchisme, p. 38.
- 註8 . Oeuvres tome IV, Catéchisme, p. 41.
- 註9 . Oeuvres tome IV, Catéchisme, p. 108.
- 註10. Oeuvres tome IV, Catéchisme, p. 140.

## 7. おわりに

あまり先を読みすぎると早すぎて世に受けないものらしい。サン＝シモンはこれに該当するようである。ヨーロッパ共同体といふ、資本主義的経済社会の議会構成、予算編成といふ、170年前に唱えたことが今の世に行われている。彼の思想はまた聖書的であったが故に、資本主義的とも受取られ、一方、社会主義的にも受取られた。彼の死後のサン＝シモンニアンの活躍は前者であろうし、一方、彼の思想を批判しつつも、彼から多くの示唆を受けたマルクス・エンゲルスは後者であるといえるのではなかろうか。

もっと詳細に彼の考えを分析し批判も加えるべきだったが、定められた枚数が許さなくなったことをお許し願いたい。